

# 東方神獸莊

夜祢亜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悲しくも学生生活を送っていた主人公。

幸福と運命の女神によるミスよって、

幼馴染ともども現世から離れることに…

さて、彼は無事に家族と再開し世界を救えるのかな？

# 目次

## 転生編

プロローグ＋1話「転生前」 | 1

2話「転生後」 | 11

3話「お邪魔します」 | 16

4話「矛盾の結果は戦術しだい」 | 20

20

5話「太極道」 | 29

#1「お風呂偏」 | 34

6話「黄金の向日葵」 | 39

7話「人里と魔導の書」 | 45

8話「手紙と旅立ち」 | 51

## 魔界編

9話「Welcome to the

Magic world」 | 59

10話「母の名は」 | 67

11話「再開」 | 72

12話「魔導の師」 | 77

13話「魔導とは」 | 84



## 転生編

## プロローグ＋1話 「転生前」

「やつと、ここに戻ってこれた…」

―名のない社―

自分の足元、東西南北にお札を貼り…そつと、気を込める。

すると、お札が白く輝き出し輪を作ったかと思うと今度はその上に輪を作り今度は空間を走り出し幾何学的模様を空、地に描く…それは虹色に輝いていた。

徐々に視界が銀色に染まっていく。

『主、何がいるか…分かん。気を付けるのだ』

「ありがとう、徹」

身体の内より、声が聞こえる…それも、1つではない。

『主様、震えてますけど…怖いのですか？』

「バカ言え、武者震いだw」

『腰が抜けてるの、若者』

「バレちゃしようがねえ、怖いよ…」

……ぷっ W

「「「はははっ W W W」」」

「ここに居る、俺の従者に居るもの達と笑う…怖さが忘れる位。

『安心せよ、我が五獣が揃えば向かう所、敵無しだろう』

「本当か？」

『…多分』

「完璧じゃないのか W」

『9割だ…それ以上は望むな。勝ち取れさすれば…』

「与えられんでしょ？」

少し落胆しつつ、大きく深呼吸する。

「まあ、お前らには頑張ってもらうから、宜しく」

『承知』

『解った』

『了解よ』

『大丈夫だ』

『心配はありません、貴方は一人ではないのですから』

「そうだな」



「いかないで、姉ちゃん」

「ダメ、私の力がないと……ごめんね？ 亜響」

手を優しく振りほどき、緑髪の少女は飛び出す。

「さな……」

そこで、意識は覚醒した。

「はっ?!」

回りを見渡すと独りになり見慣れた風景になってしまっているIDKのアパートに居ることを確認する。

「……くそ」

徐に時計を見る。

「14時か……急がないとな」

ベットから抜け出し、シャワー、遅れた朝ごはん、着替えを済ませ立て掛けてある一升瓶を手に部屋を出る。

多分、あんな夢を見たのはこの性かもしれない。

俺は部屋を出た。

1少年移動中1

俺の名は亜響……ただの高校2年18歳だ。

昼過ぎた夏の日照りは容赦なく地を焼き付ける。

それに耐えながら、俺は歩を進めた。

「あつ、亜響」

誰か、居たが無視する。

「あれあれ？幼なじみは無視ですか？いい度胸だねw」

顔は笑ってるけど、目が笑ってない…殺られる。

「冗談だ。鈴香パイセン」

「ここは、学校じゃないぞ？後、私はあんたと同年、何で高校留年してるの？」

「忙しいくてな」

仕方ないねえ…鈴香は呆れた態度を取る。

そして、俺達は同じ道を歩き始めた。

「そういえば、宿題は？」

「夏休み、三日前には終わってる」

石段を上る。

「天才はこれだから…」

「残念だな、俺は秀才だ」

「さいですか…」

彼女の様子からするにまだ、終わってないのだろう。

「何が解らないんだ？」

「数学」

「問題は？」

「1辺が10 cmの正方形の問題」

「超簡単だな……」

「すべての点がそれぞれ異なる早さで動くのに？」

「ごめん、無理」

と、課題の話をしていたら到着した。

「寺」

人の手が入っていない寂れた建物、庭。吊り輪が切れた鐘。

無人なことは一目瞭然である。

だが、ここに用はない。

その裏手、町を一望できる裏庭……

ここにある。

「いつ見てもデカいな」

こいつは桜……名前は覚えてない。

「早く済ませよう? 私ここ嫌いだから」

「了解」

樹の根本に持参した一升瓶をぶちまけ少し寂れた石碑のロウソクに光をともし線香に火を灯す。

線香の独特な香りに包まれながら手を合わせ少し祈り、樹の回りを掃除する。

「帰るか…」

「そうだね」

と言って石段の方へ向かっていくと先に行つた鈴香がちょうど生えている石段前の樹の根につまづき石段に身を投げ出す。

「鈴香!!」

俺も彼女を守るために身を投げ出した。

そこで、俺の意識は途切れた

—???—

「うつ、うつ……」

ここは、何処だ?

床は綿菓子のようにふわふわと柔らかく甘い香りがして、昼か夜なのかわからない柔和色をした空が広がっていた。

「起きたか?」

「誰だ?!」

そこに居たのはプラチナブランドの独特な髪型をした少女だった。

「幼児?」

「誰が、幼女じゃ!! 妾は神よ」

「神? お前が……」

「如何にも」

幼女が無い胸を脹る。

「名乗っていなかったの、妾は運命と人生、そして月を任されておる。クロトと申す」

「はっ、はあ……」

溜息混じりな返事で彼女の差し出した手を握る。

「急なんじゃが……お主には異世界転生してもらおう」

「ホントに急だな、元の世界には戻れないのか?」

「生憎様なのだが、お主達は現世で亡くなっておる」

「……」

奥歯を噛み締める……未練など無いが、【お主達】と言ってるからには鈴香も巻き込んだのだろう。

「やつは？」

「一足先に向かった」

「そうか、じゃあ……俺も頼む」

「了解じゃ。そうなれば、ええ……ステータスはランダム。元々あった技能や能力はそのままに……」

クロトがパソコンのようなものにカタカタやっている間暇だったので何かないか探したら本棚や、散らかっている部屋を見つけた。

……ん？これは……

「クロト？」

「(カタカタ) なんじゃ？……はっ?!」

俺が手に持っているのは角が大きく潰れた2冊の本。

「ドイツ語で俺たちの名前が書いてある気がするのは気の所為か？」

「す、すまなかった」  
「／＼〇」

「怒らないから、話してみろ」

彼女曰く、この仕事は多忙であり休めず夜も寝ずに仕事をしてるのはざらしく睡眠不足になることが当たり前だったそうだ。

その時、棚の上の方にあった本を脚立に上り取るとバランスを崩し……

「落としたりと……」

「その通りじゃ」

「お前も大変だな……」

「詫びとしてはなんだがの、望む能力を可能な範囲で授ける……なんでも申せ」  
「能力か……」

少し、思考する……すると、とあるアニメが頭をよぎる。

【錬金術】だ」

「分かった」

彼女の手から迸る光が俺の中に入ってくる。

「出口は向こうじゃ。気をつけるのじゃよ？」

彼女が指差し先に木屋の扉が現れる。

「お前も気をつけろよ」

俺はその扉を開けると眩い光に意識を失った。

……（続く）

## 2話「転生後」

—  
???

「お兄ちゃん、久しぶり」

声が聞こえる、しかし、四肢に動かせと命令するがまったく反応がない。

唖すら、全身が鉛になった様だ。

「誰だ？」

声は出るみたいだ。

「私のこと忘れたの？まあ、5年も昔だし覚えてないか……」

よく分からない……5年前？何を言っている。

「私の名前は綾鳥　ことり。半人半神、現人神よ」

「今日はよく神様に会う日だな……厄日か？w」

「そんなことは無いんじゃないかな。ありがたい日だと思うw」

2人して苦笑いする。

「ことり、だったか？俺に何のようだ？」

「ちよっと加護をね。大丈夫、代償はもらうけどゴミじゃないから……だから、上手につ

かってね♪」

そして、俺は額に暖かい感触を感じながら再度、眠りに落ちた。

―新現世―

気がついて私が感じた物は吐き気を催しそうになる揺れだった。

「亜響〜」

「はっ?!誰だお前は?」

目が覚め上半身を自分の力で支え周りを見た。

そこは、森林の最中。小鳥がさえずり、樹木が風により葉や子枝を揺らしシンフォニーを奏でる。

空気がうまい。

「よかったよ、亜響生きてた。上から落ちてきたからビックリして」

「何で、私って分かる……私?!」

ここに来るまでの一人称が言えない。これが代償か……私はそれを瞬時に理解し納得した。

「ってことは、お前は鈴香か?」

「容姿が変わっているから違和感あるでしょ?」

水色のショートカット。茶革の中折れ帽えを被り、服装は下は白のショートスカ―

ト。上は紺のブレザーを着ている。

後、目が赤い。

前の茶髪ポニーテール・緑目も好きだったが今の彼女もいい。

「似合ってるじゃないか」

「そう？でもアンタには負けそう」

「どういう事だ？」

この先に川原があるから見てきなよ……落ち葉が少し落ちている地面に手を突き立ち上がる

「体が軽い??もしかして、幼くなったのか……うわ、髪なが!!手小さいし」

少し歩き、川辺に手を付く。

「え、ええ!!」

そこに写ったのは白銀の瞳と髪を持つ美少女だった。

く数十分後く

「大体、理解できた。だから、お前の方が身長高いのな」

「前のむさ苦しい、亜響も良かったけど……この子も悪くないかも」

「おい……」

冗談だよくぼんぼん、私の頭を叩く。

「これからどうするか……」

その時、私たちの目の上（3Mくらい）の所に歪が生じた。

「離れろ」

私たちはその場から距離をとった。

そこから現れたのは二人とも見知った人物だった。

「(ドスン) ひどぶ!!」

「クロト?」

「女神様?」

クロトは強打した腰を摩りながら立ち上がる。

「どうしてここに」

「アマテラス様が……」

彼女の話によると、先ほどの失敗がばれてその罰として送ったものが一人前になるまで様子を見て来いと上司から言われたそうだ。

「大変だな、お前も」

「これからどうする?」

「妾に考えがあるんじゃないが」

知人がこの近辺に宅を構えているらしく今晚はそこに厄介になろうと言う話だった。

「奴は、面倒見はいいし、頼りになる。今は仕事を終えて飲んだくれてるじやろ」  
「のった……その前に」

私はその辺にある樹木に手をかざす。

「歩くのも面倒だろ？ いいもの作ってやるよ」

そういつて、この世界で始めて能力を使用するのであった。

……（続く）

### 3話「お邪魔します」

私達は、今坂を爆走していた。

「これは、最高じゃの〜」

「すごいだろ？自転車って言うんだ」

「巫響、何でこんなの作れるの？」

それは、この女神が力を与えてくれたからである。

私は元々、モノの本懐を知ることが好きだった。

この自転車もガキの頃、分解して覚えた。その代わり勉強派からつきしだったかな

……理由は私はじつと耐える忍ぶことが苦手だからだ。

〜夕方〜

クロトの先導でその友人の所へ着いた。

「ただの洞窟じゃないか」

「まあ、ヤツは余り身なりには気にしない奴じゃからな……ナギ？おるか？妾じゃ」

すると、奥底からかなりガタイの良い男が出て来た。

「ほう……珍しい。クロトではないか、久しいな？」



「同志の再会と可愛い来客に乾杯」

「乾杯」

神達は違和感なく飲む。

鈴香は周りを見渡し私の方を見るとそれを飲み干した。

「(おま?!ずるいぞ!!)」

内心そう思いながら、私もその液体に手を付けた。

お米の濃厚な匂い、鼻を通り抜ける甘美な香り。これは……

「おっさん、もう一杯だ!!」

「ほう、嬢ちゃん。やる奴だな?」

すると、彼は背後の一升瓶を取り出し注ぐ。

「で、話なんじゃが」

「この2人の面倒を見て欲しいのだから?」

「相変わらずでよかったわ」

「別にいいが……これは、社を構えるのを早めるか」

と、彼は今度は芋の匂いのする酒を取り出す。

「二人とも名は?」

「鈴香です」

「亜響だ」

再度、杯を傾ける。

「よろしくな。鈴、響……俺はナギ。まあ、名前なんてお前達に任せるが」

「ナギさん、よろしくお願ひします」

「よろしくなつ、おっさん」

「ふっ、おっさんかww」

そして、私は手を差し出す。

私達は焚火の熱さにあてられながら握手を交わした。

……………続く

## 4話「矛盾の結果は戦術しだい」

―洞窟内―

「主様、主様」

「ん、ん……誰だ？」

私は気が付かない内に寝ていたようだ。

眠たい眼を擦りながら体を起こす。

そこには、自分と同じ姿をした蒼い奴がいた。

「主様、お忘れですか？朱雀門が1柱。蒼火です」

「蒼火？……あれ？鳥の姿したよね？」

「はい、昨夜。偶然通りかかった所……宴に加えて頂きました」

「あの時は酔ってて、記憶が……蒼火って何者？」

「私は……鳥ですね。後、炎を操る能力をもつてます」

「この様に……と、差し出した指先から焰を灯す。」

「おお……」

「取り敢えず、ここから出ましょう」

蒼火は私の肩を支える。

少し、歩くと漸く体調に慣れてきた。

「もう、大丈夫だ。ありがとうかな？」

「いえいえ、それが従者の役割です……」

私は久しぶりの陽の下へ出た。

ー外ー

燦々と照る太陽の下、季節的には春。

木々は生い茂り生命力を惜しむこと無く緑緑と輝く。

洞窟から出て数分の所。

湖の畔へ出た。

「うわ、これ一人でやったのか?！」

「ああ、まあこれくらい出来るだろ?！」

無茶言うな……、そこにあつたのは湖に浮かぶ本殿と拝殿。

真新しい設備等も目に入る。

おっさんはボサボサな髪と髭のイメージから綺麗に揃えられており、年増のおっさんから急にイケメンになってた

(なんか腹立つw)

「おう、お主。今頃目を覚まして」

「すまない、どれくらい寝てた？」

「10日です」

マジか……(アルコールって怖)

そして、ふっと……おっさんは思い出したかのように呟いた。

「そう言えば、響。お前さん、自分の事を男とか申してたな」

「ああ、言ったか？覚えてないけど」

「俺にはお前さんのなりはないように見えたが？」

こいつつ?!……私はカチンときた。

「み、見たな!?!変態!!変神!!」

「……見せたのはお前じゃ」

「はっ?!」

(やはり、アルコールは怖)

それから、蒼火から私が記憶のない所を補填してもらった。

「つ、仕方ない……決闘だ」

「別に何も実害はないのだが……」

「私の気持ちの問題!!」

それから、私とおっさんでコロシウムなるものを3日で作った。

ー3日後のコロシウムー

竜一匹すら、見出せない青々とした快晴の空の下。

「これより、ナギ様と主様のケンカ。もとい、試合を執り行います」

二人は同時に大地を掴む……

私は槍を、ナギは盾だけを錬金術で作り、それを武器とする。

「盾なんかで戦いに勝てると思ってるか思ってるよな?」

「それは……分かんぞ」

その声はまるで勝ちを確実に得ることが出来る風に私は聞こえた。

「私の生み出したる、この大地よ。どうか、我を隠したまえ」

その調べに呼応するかの様に地面から土の壁がせり出しナギを包む。

「残念だが、俺の武器は鉄だ。そんなもん、崩してやる」

2、3歩後ろに跳躍し、鉄槍を投げると共に自分も飛ばす……

これをやる事により威力が幾分かマシマシになるっておじさんが言ってた。

ナギのいる繭に近づく。

すると、声が聞こえた。

「矛盾って言葉知ってるか？」

矛盾、その昔とある国の防具と武器屋の二人が互いに世界最強を名乗り結果は残っていないと言うもの。

「あれはな、武器の性能を鵜呑みにして迷った衛士がその光景を日誌に書いていたものが始まりなんだ……」

所で、お前はどっちが勝ったか分かるか？」

「槍じゃ、ないのか？」

「いや、正解は……」

私の槍が繭を突くと中に黒い盾を持った奴がいた。

「それは!!」

「タンングステンだ、前世で勉強したろ？」

私の槍は盾に弾かれる。

先は潰れ、折れ曲がった槍と私はナギからすると、真上に打ちあがった。

「勝ち負けは武器の性能じゃねえ」

「なに?!」

「使う者の技量も勝敗を左右すんだよ」

私はそのまま、落下する。

(まずい、落ちる)

カラン……ドツサ!?

「ふう……やれやれだ」

「おっさん……なん、で」

私は徐々に意識を失った。

「こいつが、まともな奴で良かったよ」

「しよ、勝負あります。主様!!」

「大丈夫だ、多分、能力の使いすぎだ」

ナギは私を肩に担ぐとそのまま、会場を後にした。

—灰色の神社—

「また来たの？」

「呼んだのはお前だろ」

灰色の世界で唯一、緑と赤の衣を身に纏い世界から浮き彫りに見える幼女を指差す。

「ひとつ、聞きたいことがある」

「なんでも、どうぞ〜」

「ことり、お前が俺に与えた恩恵つてのはなんだ？さっぱりだ」

両手をあげ、お手上げのポーズをとる。

「代償には気づいてるみたいね」

「ああ、俺も馬鹿じゃないしな」

ことりは俺の周りをぐるぐる回った。

「なんだ、まだ発芽のはの、はの字もでてないや」

「どういう事だ？」

不意に額にキスされた。

「なにしてんだ?!」

「Lvを上限マックス迄、上げたから常時見えるはず〜」

視界が揺らぎ眠気がやってくる。  
現世に帰る合図である。

―社―

「はっ?!」

上半身にかかっていた掛け布団を跳ね除け目を覚ます。

「大丈夫ですか?」

「ああ、だいじょ……はあ?!」

「どうしました?」

蒼火の体から、白い焰の様な物が出ている。

「あつ、起きたんだ。アンタ大丈夫?」

「い、いや……人の心配より自分の心配しろよ」

鈴香からも赤いものが出ている。

「ほう、嬢ちゃんは加護を受けてたか」

「誰が嬢ちゃんだ!!」

ナギ曰く、加護とは神が認めたものに力を与える事を加護と言うとか言わないとか。

「これは、太極道を教えなくては（これは、他神からの挑戦状だ）」

「いや、何。自己完結してんだよ」

「詳しいことは、後々話そう……俺も急がしんだ」

おっさんは鍬を手に取ると社から姿を消した

……………続く

## 5話 「太極道」

コロシアムから社場所まではそう遠くはない。

しかし、森の中腹にある為、迷いやすい。

そんな所に俺達は今日も来た。

ーコロシアムー

私と鈴香はクロトのお手製道着を着て、ナギと対面していた。

「この世には、3つの状態がある。

1つは正（＋）の状態。

2つ目は負（－）の状態。

最後は零（±0）……2つの中間だ」

「ふむふむ、確かに」

「へえーそうなのか」

鈴香はよく分かってないやつ典型的な返事を返した。

「鈴香、話聞いてたよな？そこまで難しくないぞ？」

「聞いてたよ？……で、ナギ。その太極道って？」

「良く聞いてくれた。その3つは零を基準に波となつて常に変動している。この風もそうだ」

すると、風が被り物があると飛びそうな風がピタリと止んだ。

「まさか」

「俺が……風を止めた」

「嘘だ!!」

すると、鈴香の方にだけ風が靡いた。

さつきより、強い風が……

「ごめんごめん、私が悪かったよ」

「分かればよし、この様に状態を御し万物が……」

風、水、焰、タイプは人それぞれだが己が性質を理解できれば免許皆伝だ」

「ホントに出来るのか?」

風を操つたつて、マグレかも知れないし……

「では、例を見せよう。朱雀門」

「ナギ様、ここに」

蒼火がナギの背後から現れた。

「さつき、2人に掃除してもらった山があるだろそれを“燃やせ”」

「畏まりました」

彼女がふつ、と息を吹きかけると集めた木々や枯葉が勢い良く燃え広がり炎があがった。

「「おお……」」

「次だ、凍らせろ」

彼女が手を翳すとそれに呼応するかの様に炎が手に吸い込まれやがて、霜が降り……凍結した。

「ええ?!嘘?!」

「すげーなあ」

「お褒めいただき、光栄です」

「最後だ、朱雀門。同時にやれ」

目の前で怒ったのは奇跡だった。

凍った山が、溶け始めると同時に何処からか炎が上がりその溶ける水滴の蒸気と、炎が手を繋ぎ演舞を興じ螺旋を描く。

終わる頃には灰が残り、それをナギが風に乗せてどこかへ飛ばしてしまった。

「これが、極意で生き物も生まれながらにしてこれを行っている」

「呼吸とか、魂動だろ？」

「正解だ。お前は全て見えてだろ？」

「えっ?! 鈴香ちゃん、不思議なことが起こりすぎて訳ワカメだよ?」

俺は見えていたおっさんのだす黄色のモヤモヤや青いモヤが……

「まず、1つ目の課題は【浮遊】だ。重力の縛りから解放される術を見い出せ」  
すると、ナギは1m位の宙に浮かび静止した。

「よろしくお願ひします」

その言葉から半年が経過した。

―半年後―

「お前が先に会得すると思ったんだがな……」

「歪響って、感覚系のこととは苦手だよねー（ふわふわ）」

「うっ、うるさい。黙ってろ」

理屈じゃ分かっていても、どうすればこの自分の気（らしい）が操れるかさっぱりで全然浮くことも出来ない。

「お前は視覚に囚われすぎだ。目を閉じて見ろ」

「目を閉じて? 分かった」

目を閉じてまず、最初に聴覚が鋭くなった、近くの雀の声や遠いはずの湖の魚が跳ね

る音、クロトが布団を社でバンバンと叩いてる音……これはどうでもいいな。

次に触覚が鋭くなった、引きつける大地の力。

「重力、こいつはどうも出来ないな」

次に風、吹いては止み、また別の方向からも風は吹く。

「風？ そうか、風を……こいつにアクセスすれば……」

目の前の風を手で掴む、すると、私の気が風に乗りどこかへ吹く。

それを、自分の真下から上に突き上げる感じで風を操る。

気が付くと……

「……ん、私。浮いてる?！」

「お前も合格（ご）オー……（ご）……（ご）……制御しろよ」

画して、私達の修行は続くのでした。

………続く

## # 1 「お風呂偏」

—社内—

「誰だよ、神社に銭湯なんて作った奴」

「私だ」

「ナギかよwだろうと思った」

飽きた、まあ、私も日頃の疲れを癒したいと思っていた処だ。

「しかたないの。冬場は仕事がないし、ひとつ風呂あびるかの。なあ、鈴香よ」

「ええ、女の子か知らないこと……たくさん、おしえて、あ・げ・る♪」

鈴香とクロトが手をワキワキさせながら眼を怪しく光らせ、此方へジリジリと滲み

寄って来る。

キモい、マジでキモいよ（泣き）

「い、いや。ワタシハ後デ、ハイルカ（ガシッ!!）クロトさん？」

左腕を掴まれる。

「いいや、まだだ。私には飛べる……今、（ガシッ!!）ぐえ!!!」

変な声出た。

背後から、鈴香から首を掴まれている。

「逃がさぬよ、こんな、面白いことは久方振りだからのくなあ、鈴香殿よ？」

「そうだね、女神様。私も気になる。胸とか」

「こん、畜生が!!」

脱衣所でサツサツと衣服を脱がされ、シャワーの前に座らせられる」

「(カチャ!!) ここは、密室だからね」

「さあ、身体を洗いますかね」

「屈辱的だ……覚えとけよ」

鈴香がヘチマを乾燥させたスポンジに石鹸水を含ませ、身体を洗いに来る。

「……んっ、ん。はあくどこ、洗って」

「おっぱい、ちっちゃいね? (ふにっ)」

「ひゃん!?!」

今の、変な感じ……

亜響は、慣れない感覚に身体は正直に反応を返した。

「この〇〇がな、女子の秘部でな……取り合えず、指を入れるかの?」

「やめて、やめて……(ゾクゾクゾクツ)っ、カッハッ」

なんだこれ、脳が、身体が

……震える。

「はあく、は。はあく、は」

「声荒げちやつて、すごく可愛い。もっと、虐めましょう。女神様？」

「いいていあんじやよ。妾も興が乗ってきたところよ。さて」

私は、男の身体では体感できない領域まで達し、意識を失った。

— 銭湯・番台 —

「の、上せた」

「アホだろ……お前ら」

クロト達は私を散々、陵辱すると脱水症状を起こし、こうして看護する羽目になった。

「よう!!」

「ようじゃねえよ、おっさん」

お風呂上りのナギと出くわした。

「どうだったよ」

「……不思議な感覚だった」

「まあ、初めてはそうだよな……よっ」

おっさんは、風で身を纏ったと思うと目を眩ませる光を放つ。

「俺が、女の格好でいれば問題なかったけどなww」

「返信できるならしろよ!!!」

わりの、わりのw……ナギは空笑いをかえす。

「じゃあ、何だ……俺はただ、お前らに遊ばれたのか」

「そうなるな」

「くそっ」

私は心に誓う。

「お前ら、1回締めてやる」

「やってみろよ」

「ほえ?何?」

私は上せた鈴香に指を突く。

「決闘だ!!」

その日から、私と鈴香、クロトの熾烈な争いが繰り広げられたことは誰も知ることは無い。



## 6話 「黄金の向日葵畑」

ここに、社をかまえ……5年が過ぎた。

私は零弾を会得し、空もある程度自由に飛べるようになった。

ー少女休憩中ー

「暇だなあ……」

「暇だったら、家事を手伝ってください」

蒼火が、洗い物の入った洗濯カゴを押し付ける。

「いや、私……料理以外は何も出来ないよ?」

「ぐぬぬ……しかし、何事も経験ですし」

「洗濯機、乾燥機作ろうかなあ……」

「なんですか?それは、まあ……今夜も期待してますよ?」

そう言つて、湖の方へ飛んでいった。

「ん、散歩でもするか」

よいしょつと、思い腰を上げて私は晴晴とした空へ向かつて行った。

……

季節は夏前の雨季過ぎ。

燦々と照る太陽が私を蒸し焼きにする。

「暑い……まだ、夏じゃないのに」

そんなことを口にしながら、ふわふわと浮いていると遠くの方でキラリと光る物が目に止まった。

「なんだろう……行ってみるか」

私は浮遊状態から一気に加速状態に切替えて現場に向かった。

……

「なんだよこれ」

そこにはあったものは、黄金の向日葵畑ひまわり畑であった。

見渡す限りの黄金。

一瞬、もぎ取り持ち帰ろうとも思ったが、これ程の量である……逆に気味が悪くなつた。

私がマジマジと見ているそこに、どこからとも無く1人の女性が駆け寄ってきた。

「アナタ、何者？ここに、何しに来たの？」

「私の名前は亜響。金の向日葵ってどうやって作ったんですか？」

「奴らの主人じゃないみたいね。紹介遅れたわ……私は風見幽香。この庭園の管理者

よ

すると、こちらに向けていた閉じた傘を下ろした。

「この花達の事を気にかけてくれたのね。嬉しいわ」

「いえいえ。でも、どうして金なんですか？」

「奴らよ……黄金の巨人。貴女にも手伝ってもらおうわ」

ドスン!!ドスン!!と音を立てて、2体のゴーレムが花畑を踏み歩きながら迫って来ていた。

「こいつら、DQで見たことあるw」

「来るわよ」

ただ、散策していた筈が……戦闘に巻き込まれるとはお待ってもみなかった私でした。

……

デッテテ、デッデッテテ……どこからとも無く戦闘BGMが聞こえてくる様な気がする。

「奴らは触れたものを黄金に変えるわ……気を付けて」

「分かりました」

「ゴォー……!!」

ゴーレムAが大地を掴み岩球を投げつけてくる。

「よっ、と」

「私はちよつと、時間がかかるから……それまで、気を引き付けて」

「分かった」

「彼者は大地を照らす温かき我らの父」

ゴーレムBが彼女に拳をぶつけようとする。

「させないよ〜」

私は先程の岩球を錬金術で盾を作り彼女を守る。

「その力を、少しだけ我に与えたまえ」

「やっぱり、金を変えることは出来ないみたいだね」

ゴーレム達のラツシユを盾で受け止める。

すると、少しずつだが歪みが生まれてきた。

「風見さん、もう限界!!」

「その力持つて、敵を打ち滅ぼさん……避けなさい」

盾を捨て、上空へ私は急上昇する。

「シャイニング・マスタースパーク!!」

傘の先がキラリと眩しく輝くとと光の波動と熱が直線上に放たれる。

その直径、8 m強。

ゴーレム達は溶解し、その場に金塊の山が築かれた。

「すごい、技ですね……（啞然）」

「貴方が居てくれて助かったわ……ありがとう」

「いえ、暇だったので」

すると、ゴーレム達により黄金にされていた向日葵は元の色を取り戻し、彼らは嬉しそうに擡もたげげた首を、こちらへ向け会釈する。

「うっ、動いた?！」

「ふふっ、ここは幻想郷よ。常識に囚われては行けないわw」

「あの、良ければ……」

弟子にしてください……深々と彼女に頭を下げる。

「弟子は取らない主義なの……でも、友人なら歓迎するわ」

「ありがとう、風見さん」

「私のことは幽香でいいわ」

よろしく、幽香……私達は熱い握手を交した。

「丁度、お茶にしようと思ってたの……貴方もどう?」

「喜んで♪」



## 7話 「人里と魔導の書」

あれから、更に5年……俺達は太極道を会得した。

「鈴香の姿が見えないんだが」

「旅行に行くつて。もつと広い世界を見たいんだとよ」

「アイツ……」

舌打ちをする。

「俺達も少し西方へ行くからよ。留守番、よろしく」

「ずりぞ」

「こいつら、本当何考えてるんだよ。」

「主様？私はいますよ？」

「蒼火（ガシツ!!）」

「あつ、主様?!」

彼女は亜響の行動に戸惑いあたふたする。

「はいはい、臭い芝居はそこ迄じゃよ……多分、すぐ帰ってくるじやろ」

「バレてたか」

べえー、舌と脛を差し出し神を愚弄する。

「お前にはお使いを頼んでおく」

「お使い？」

内容は最近の人里の方が不穏な気に駆られているみたいだ。

おっさんの推理じゃ、魔法の力がどうたらこうたら……。

「あれが、見えるだろ？」

「なに？青の気？見えてるけど」

まあ、確かに……見慣れない気色ではあるけど、

私は、おっさんの意図が読めなかった。

「確か、里の書物屋が異国の書が入ったと喜んでいましたね」

「それだ、その書をうば……買い取ってこい」

「今、奪え……と言おうとしたよな」

「ごほん……えー」

おっさんは、魔導がこの世界に何を与えたか……それを難しい言葉で教えてくれた。

「要するに魔導が人類の人々の安寧秩序を大きく揺らぐ。そう言う事だな」

「そんなところだ」

「……神々はこれを避けるため、出た杭は打ちたいと」

「そうだ」

おっさんは、いつにも増して真剣な眼差しで私を見据える。

「どうすればいい」

「金なら、お前が持つてるだろ」

「あの向日葵印の黄金塊」

ゴーレムの件から数ヶ月……

私は幽香の元にお邪魔しお茶会をしたり、畑仕事を手伝っていると……

「あのね？この間、荒くれ者を倒すのを助けてくれたわよね？お礼がしたいの」

何がほしい？そう聞かれた。

しかし、私はほしい物など無く返した答えが……

「幽香がいらぬものでいいよ」

言うど、金塊の山を私にくれた。

「処分は任せる。好きにしろ」

「……わかったよ」

その次の日、2柱を見送り。錬金術で作った水素ガスで動く二輪車で向かった。

——人里——

里は何時にも増して活気づいていた。

理由としては、市が開かれているからだと思う……

「いっか」

そんな中でふと、その流れに飲まれていない店があった。

店に入る……紙のカビ付き乾いた匂いと墨、それと店主が焚く香の匂いが鼻につく。

「邪魔するよ〜」

「らっしやい……おや、湖の巫女様じゃないですか、どうされました？」

「巫女が訪ねる時は、どういった時か……知ってるよね？」

「はい、祝い事が厄災の際に現れると聞いてます」

店内を軽く見渡す。

外の世界が今、どれくらい文化のレベルにあるかは知らないが、

店内に置かれているのはどれも半紙により書されているものばかりだ。

「そうだ、今回は厄災だよ。その本、私が預かる」

「い、いやだ!!この本は、とても貴重な海の外資料なんだ。渡すわけには(ごころつ)へえ

?!」

まずは、机の上に金塊を一つ積む。

「タダで……とは言わないよ、言い値で譲って欲しい」

「いや、この本は（二つ目）?!!」

……と、本屋の店主と静かな駆け引きを繰り広げた。

—数分後—

店主が折れるを待つまでそう時間はかからなかった。

人間、只少し力を持つ珍しい道具と親子何代も使いきる事の出来ないお金を天秤にかけてしまうと

お金に心奪われる。

「あ、ありがと……ござあ、した」

「ありがと、本居のオジさん。良い生を」

そうして、私は手持ちの3割の金を消費して、獣の皮を使ってある魔導書を手にした。

帰路につき、蒼火にただいまと伝え部屋に向かう。

「さて、読んでみるか……」

サラサラとした毛皮で出来た表紙を掴む。

そこに書いてあるのは見覚えのある字であった

「これは……母さんが教えてくれた遊び文字」



## 8話 「手紙と旅立ち」

―湖の社―

「んー、こんなモノかな」

「主様、ごはんですよー」

「はーい、ん？」

私は、あれから魔術について独学でひっそりと修練していた。

「しかし、謎なんだよなあ」

「何がですか？」

「いや、魔術で使っている言語だよ」

私は不思議だった。

「この言葉を使い生活をすると思っていなかったのだ。

「響、それから……どうだ？魔術の習得は」

「習得は追々かな。太極道を学んでいたから、結構簡単だったよ」

「そうか、まあ……どんな、理屈の基礎だからな」

そう、基礎なのだ。



「なんだ？いまの泣き声」

「ほう……早かったの」

バサバサと音を立てる方向を皆で見つめると、そこには白銀の翼を持つ獣がこちらに向かつてきていた。

「フクロウ？って、私のほうに向かつてくるの?!」

どこからか来たその翼獣は速度を落とすことの無く此方に向かつて来ていた。

「焦るでない」

「いや、これぶつかるよね」

反射神経で眼を閉じてしまう。

「(ぶつかる?!)」「pie?!」えっ?!」

しっかりと閉じた瞼をゆっくりと開け放つ……

眩い光に順応したのちに外の世界を捉える。

そこには、先程の大気を扇ぎ打つ獣が鎮座している。

「いつも、ありがとうね(バサバサ)あれ、もう行つてしまった」

獣がいた足元には白と黒の二つの封が置かれていた。

「手紙じゃ、こっちは妾の。こっちは、お前さんのじゃな」

「誰から……」

「まあ、中を改めてみよ」

金色の口ウで硬められた封を開く。

「……よ、つよめない」

魔術言語に見えるがそう読もうとすると意味が分からなくなる……しかし、最後の一文だけ。

『? (○) 困った時はこの手形を道行く者に見せなさい。久しぶりに顔が見たいわ……母』

「クロト……」

「なんじゃ?」

同封されていた、黒い布地に金の刺繍がされた小物を握り締める。

「母さんが、生きていると聞いてないぞ!!」

「言ってなかったかの?」

と、女神は少し困った顔をして首を傾げる。

「初耳だよ!」

「確かに言ってなかったの、ふむ」

手に持っていた箸を置き、皿を片付ける。

「で? どこに、いるんだよ」

「あそこじゃよ、魔界じゃ……ここより、マナの濃度が濃くつての魔法を使う強い獣がよ

く出るの」

強い……獣か、私は少し考える。

「蒼火」

「はい、ここに……」

「おっさん……どこ行つた」

「いつもの、釣りだと思えますけど？」

「呼んでくれ……場所はスタジアムに」

「承知」

そうして、蒼火は滅多に離れることない社を離れた。

ースタジアムー

程なくして2人は相見えた。

「久しいなあ。亜~~田~~」

「ああ、ここにアンタは何年も来てないからな」

「はっはっはっはっw」

2人の空笑いが、大気を震わせる。

「俺を呼ぶという事は、この前のリベンジか？」

「ああ、かかって来い」

「分かった、じゃあ」

「まいる!!」

ーリベンジの数日後ー

「じゃあ、行ってくる」

1ヶ月分の食料と野営道具をバイクに載せる。

「お世話になりました」

蒼火は神々に頭を垂れる。

「いや、楽しい生活だった。ありがとうな」

「元気でいるのじゃぞ?」

「気をつけるよ」

と、縛りの甘い荷物を再度、積載し直す。

「後、帰ってこようなんて思うなよ……」

「それは、どういう事なんですかねえ」

「妾達も、長い旅に出る」

私はその後の短い沈黙を切り開く。

「それは、空へ戻る帰るのか?」

「正式に発表があった、これが通知よ」

彼女の手にはいつの日か見覚えのある封書があった。

「そうか、じゃあ……暇つぶしにいつか会えるな」

クロトが泣き始める。

「だから、妾達は……」

だから、私は笑う。

「会いに行けばいいだろう……上へ」

クロトは嗚咽する。

「クロト……うっ、泣くなあ」

「ナギも、泣くなあ」

二柱は心から泣く、それは寂しさからの哀しみ……これまでの記憶からの嬉しみ、色んな感情が渦巻き天を衝く。

彼等が育てた宝は眩い程、育ってくれた。

もう思い残すことは無い……

「だからさ、これはサヨナラじゃないんだ。

だからさ、笑って見送ってくれよ」

「クロト様、イサナギ様。お元気で……」

「また、会おう。この世のどこかで」

「元気でな」

その言葉を背に受け私達は単車に跨った。

12人の去った後―

「ナギよ、泣かなかったのではないのか？」

「クロト、お前が言えるか？」

(ふっH A H A H A W)

彼等の希望はこれから様々な難題に行き着くであろう。

だかしかし、彼らは信じるあの子を……そう、折れることの無い信念と意志を持った彼らを信じて……

二柱はこの世界を去った。

……………第1章 転生編 終

## 魔界編

## 9話「Welcome to the Magic world」

私達はいくつかの山や谷を超えて手形が出す魔力を頼りにその道へ進んだ。

「あの……まだ、なんですか？」

「この、魔力線が指す場所がわかるまではな」

……はあ、溜め息しか出ない、ここ2、3日同じ場所をぐるぐる回っている気がしてしょうがないからだ。

「それなら、空から大体の場所を見ればいいじゃないでしょうか？ 私にはその魔力線は見えないので、なんとも言えないんですけど」

「その手があった!!」

ただちに荷物をその場に置き空へ。

「あそこかな？」

その光は、これから向かう山の中腹を差していた。

そこを念頭に置き、単車に跨った。

「また、洞窟か」

わざとかか?……この世界に来て大抵の者は穴の中にある事を理解した。

「行ってみるか……」

「暗いですね」

よつ……蒼火はいつかの日のように指先に火をともし先頭に行く。

私も周囲の安全に気を付けて後を追った。

―数十分後―

「さ、寒い」

深く潜ったからだろう、徐々に吐く息が白く濁り、夏服の性がよけい肌を撫でるように寒さが襲う。

「主様?」

「気にしなくていい……ほら、ここで終点みたいだ」

と、広い場所に出たみたいだがそこには目立った物は何もなかった。

「なにも、ないな」

「そうですね」

隠し扉でもあるのかと石壁を叩いてみるが何も起きることは無い。

「光はここで途切れてるんだけど……」

「お困りのようで？（ニツコリ）」

「そうそう、魔界に行きたいんだけど……はっ、はあ?!」

「ここまで、周囲の確認は怠らなかつた……つて事はだ、こいつは  
『初めからここにいた!!』

反射的に間合いと武器をとり戦闘態勢に入る。

「ちよつと、落ち着いて……私はエイミー。門番さ」

「門番？門なんてないぞ？」

「それは、……」

この世では初めて聞く言葉を口にし、タクトのようなものを振りかざすとその辺の岩を起点として、次元が歪み始める。

「おお、これが魔法ですか？」

「いい目だね、青い人。残念だけど、これは魔導具のお陰だよ」

「すごいだろ？これが魔術だよ」

「どうも、ありがとう。」

そう、いいかけ門を潜ろうとした所……右頭部を杖で指された。



アーチ型の鳥居に見立てられたオブジェクトの周りに石碑が輪をかいて6つ配置されている広場にあらわれた。

「ここが魔界か」

「暗いし、空気も淀んで不気味ですね」

空は、夜のように暗く3つの月が輝いていた。

「とりあえず、魔界に着いたけど……魔力線は見えなくなつたし、道のりに進むか」

そう言つて、一歩踏み出すと袖を引かれた。

「どうした？」

振り返るとそこには少しきつそうな蒼火

「あ、あの。申し訳ないのですけど神力が切れそうで」

「わかつた。お疲れ、蒼火」

と、彼女が私の身体に戻ることにより瞳や髪に青色が交じる。

そして、道なりに歩いている時だつた……

「きゃあ!!」

少女の悲鳴が耳に届いた。

……

「ベアー!!」

「だっ、誰か!!」

現場が見えてくると白づくめの少女が紫色の獣に襲われていた。

「待て!! (とうっ)」

「ベアー?」

高く跳躍した私は空中で右足を突き出し、

蒼火の神獣力で落下に対しバーニアを吹かし、更に加速する。

「べ、べああああ!!」

私の蹴りは獣を貫き、地面に余波を残す。

「やり過ぎたか……」

「大丈夫ですか? お怪我は?」

蒼火が私の身体を離れ少女に声をかけた。

「ええ、大丈夫。えっと、アナタは」

そこで、蒼火はわずかにない胸を張りこう言った。

「私たちは通りすがりの旅人です」

「双子?」

「いえ、私は主さまのお姿を借りているだけなので」

と、一瞬だけ姿を鳥に変え、亜響の身体に返る。

「私の名前は亜響。さっきのは蒼火だ」

「亜響さんに、蒼火さん、ご丁寧に有難う。

私の名はルイズ。しがない下級魔法使いよ」

お辞儀をし、離れたところに落ちている白い帽子を手に取る。

「ルイズさんは何故、こんな所に」

「えっと、薬草を取りに来てたの」

そっと、籠の中をそっと見せてくれた。

緑や赤いハーブ、見たことの無い草花だらけだった。

「これで、ポーションを作るのが私の日課なの」

「そうなんですね。これから、街へ？」

「ええ……そうです」

私は少し考える。

「一緒について行っても？道が分からなくて」

「んー、いいですよ。そうだ、私行き着けの喫茶店があるんです」

そこでゆっくり、珈琲でも飲みながら話でもしましょう……そういつて、彼女は私の手を引いた。

「お気遣い有難いんですけど、私たちココの通貨を持ってなくって」

「お気になさらず、今回は私が出します。お礼です」

「ルイズさま、申し訳ない」

「あ、お二人は外の人なんですよ。聞きたいです……外の事とか」

そう、3人は談笑をしながら街へ向かった。

………  
続く

## 10話「母の名は」

—カフェ・Totoro—

「ブラックコーヒー2つに、ミルクティー1つ。バナナホールケーキ1つですね」  
「ええ、よろしくお願いしますね」

ルイズは店員に注文すると、端のテーブル席に誘導し座する。

「それで、お二人は現世から来られたと聞きましたけど。いつの時代ですか？」

黒船来航とかされてまして?」

「いえ、来てません。しいて言えば、その時代の前でしょうか」

「そうなの」

ルイズは水不足な観賞植物の様にしなびれて見えた。

「ルイズさんは現世の事について詳しいいですね」

「ええ、私、魔法はある程度習得していて、やる事がポーションの研究位しかなかったんだけど、

最近、図書館に外の事について書かれた本が入ったみたいでよく読んでるの」  
頼んだ飲み物に口をつけるとほっと、溜め息をついた。

「それで、なんの御用で魔界へ？」

「旅行目的と……」

笑うなよ？ そう顔に浮かべて彼女に例の封筒を手渡した。

「なにになに？ この者は、”パンデモニウム”が招きし客人である?!?!」

その手紙を読み終えたルイズは頭を抱えだした。

「大丈夫ですか?!」

「なんでもないわ……別に、目の前に人物が”神綺さま”のご嫡出子だなんて聞いて、ビ  
ビッてなんかいないから」

「……」

確かにアナタと目元とか顔の輪郭がどこの無く似ている気がしますわね……と、  
カタカタ震える手でミルクティーに手を付ける。

それは、喜んでいいのか……悪いのか……

それから、彼女と世間話をしていると、

「は、はあ」

と、ルイズはため息をつく

「どうされました？」

「いえ、唯……もう、夜も更けてきましたし、このまま宿に連れ込んであんな事やこんな

事したいなあと思っただけで……」

そう言って、まるで羞恥心を隠すかのように飲み物を口に入れる。

「いいですよ？」

「(ぶはっ!!)」

口にしていた飲み物を吹き出す私以外の人達。

「「ゲッホゲッホ……」」

隣の人も器官に入ったのかな？

「蒼火、見栄を張って飲みなれない物を飲むから」

「誰のせいですか!!」

と言われるが、私は別に気にもしておらず……

「別にいいじゃないですか？そういう話は何界で耐性がついたので気にしてません」

「(汗) 提案した私の貞操が危ういわ。あなた正気？」

「ええ、折角こんな形なまです。やっちゃえ、NESSAN」

「……はあ。わかったわ、私の泊まってる宿に案内してあげる」

すると、彼女は気の重くなる腰をあげて会計をすませた。

「マスター、少し響くかもしれないけど……よろしい？」

「いつも、有難うねルイズ……防音魔法はかけてあるから」

私たちは彼女に着いて行き2階の宿部屋に招かれた。

―街の中央・祠―

「この石碑に魔力を通せばパンデモニウムへ転移するわ」

「色々とありがとうございました」

「……プルプル」

元気な主と痩せ細った従者。

それは気にせず呼吸と共に大気のマナを取り込み魔力を練る。

「ルイズ、また会いましょう」

「それは、難しいかも……でもいつか」

そう、別れを告げて私の意識は跳んだ。

⋮  
続  
く

## 11話「再開」

—  
???  
—

「んっつ、んっつは」

多分、魔法に慣れてないからだろう、  
気が付くと私は大きな広間で倒れていた。

そこは、辺り一面が白く所々に赤と金のカーペット、カーテン等の装飾品で豪華に飾られており、神秘的な感動を受けた。

「やっとな、少々遅いのじゃないかしら巫響？」

声の主は、中央に敷かれたカーペットの先の玉座に座しあきれた様な声でそう話す。

神綺……私と姉さんの母にして魔界唯一の神。

幼いような風貌をした銀髪煌眼な彼女からは相変わらず高圧的な態度を醸し出している。

「そつちも、私の覚えてる姿から幼く見えるけど整形でもしたの？」

「あれは、私の分身よ。姿なんて魔法で自在に変えることが出来るでしょ……」  
相変わらずだ……ふと、懐かしい過去の記憶がふと顔を出した。

「で？要件は」

「……我が子の遅しく育った姿が見たいと言う母心を理解して欲しいわ。後」

「後？」

左手を高く掲げパチンつと指を鳴らすと金髪で赤いメイド服を着た人が屏風を抱えて運んで来た。

「夢子、ありがとう。何年も渡してなかった私からのプレゼントと思うといいかしら」

「虎？（主様）どうした蒼火……っつ」

屏風に近寄ろうとするとひりつく様な風がそれから溢れてきた……これは、どこかで……はっ?!

「魔封じの屏風。これには、アナタの従者の様な虎の化身が封じられてると聞いてるわ」

『……出せ』

「ん？」

『我の声が聞こえるのか、頼む我を解放してくれ』

「誰」

『……頼む。礼は尽くす』

「わかった」

少し考えた。

「母さん、これは別に壊してもいいんだよな？」

「……出来るならやってみなさい」

それを聞いた私は、背丈の何十倍ある天井に跳躍で足をつけ重力加速と神力を靈力に  
割増変換ブーストを行い

「ふっ……今期、二度目の

“ライダーキック”だ」

と言つて加速した。

彼女の蹴りはつま先に蒼白い閃光を放ちながら、岩石製であろうその屏風を貫いた。

すると、割れた屏風からモクモクと煙を立てながら、同時にパチパチと静電気のようなヒリつく空気が辺りを覆いだした。

「久方振りじゃのう。外は」

「虎徹」

「その声は……蒼火か？ 久しい……うん？」

その声の主は煙から姿を現した。

それは、一言で言うところ黒い大虎がそこにはいた。

「人化じやと」

「ふむ、主従契約です」

虎は亜響の方を向いた。

「お主、名は？」

「亜響だ」

「ほう、いい名だ。助けてもらった礼だ、手を出せ」

亜響が手を前へ出すとそこに虎は頭を垂れると白く輝き、その内の一部が彼女の背に飛び蒼火の鳳凰の紋の隣に紋が現れるのが感じ取れた。

「俺の能力は雷だ。覚えておくんだな」

そして、ポンつと音を立てて虎はヒト型になった。

容姿は亜響と同じ姿をしているが、褐色肌をしており、髪や眼が黄色。両頬に白い牙の模様がある姿になった。

「よろしく頼むよ。虎徹」

「徹テッでいい、マイマスター」

と言って、虎徹は自分の神力で檻褻切れを生成し盗賊のような格好になった。なんか、様になっていることに私は驚いた。



## 12話 「魔導の師」

(それから、神殿を訪問して1ヶ月位が経過した)

「そう言えば、亜響」

「何、母さん？」

母さんの仕事の補佐を行っている最中であつた。

「あなた、人間じゃないわよね」

「そう……なのか？」

自分では気にしてはいないが、言われてみれば、

私はこの世に落ちて身体の成長を感じる事がないと言えばそう思う気がした。

「マイマスターの気の流れは常人のモノではないぞ。よく、抑えられているが容姿と纏っている気の圧が違って俺は初めて会った時に冷や汗をかいた」

「そうなのか？」

長い時を生きる者がその様なリアクションをするとは思わなかった。

「そう言えば、前の世界から見ていましたが身長とか伸びてないですね、なんででしょう」

蒼火は不思議そうに話した。

すると、神綺が……

「あなた、神獣使いになったでしょ。それが原因よ……」

「そうなのか!？」

と、続けてこう続けるのであった。

「ねえ、亜響。そろそろ、本当の魔術を学んでみない?」

「本当の……魔術」

そうだった、ここは魔界……魔術の源流、魔法が存在する世界。

今、手にしているこの書類も魔法に関係のあるものかも知れない……

「魔術……興味はあるんじじゅやない?」

「……」

幼い時に教えてもらった、私と母を繋ぐ秘密の言葉。

それが実はこの世界では意味のある日常の言葉。

この世界に来て生活で慣れた身近な言葉。

すこし、考えたが応えはすぐ出た。

「わかった……私、魔術を学ぶよ」

「そう……」

神綺はにっこりと明るい笑顔をすると柱に沿われている振り子時計を見つめた。

「じゃあ、ランチの後ついて来なさい。いい教師せんせいがいるの」

その言葉を聞いたのちに、私たちは執務を淡々と遣りこなすのであった。

—神殿外れの建物—

魔界は広い、地球の様に朝、昼、夜と時間の流れを感じさせる所もあれば、常に夕方など体感する季ときの移ろいを見せない場所もある。

この神殿がある場所もその一つ。

そして、その神殿のすぐそばに存在するこの建物は見た感じ人氣が感じられない深夜のアレな雰囲気醸し出していた。

「これ、アレじゃん。夜の学校じゃん」

「怖い?」

怖いか……その感情はこの転生して抱いたことはないと言えばなかったな。

「強がらなくていいわ。ここでは貴方に勝てるのは私くらいなもの」

「母さん……」

久方振りの肉親の声に落ち着く。

母の言っていた先生、どんな人だろうな。

そんな事を思いながら廊下を進んでいると、トットつと足音がする。

「あら、またおぼけかしら?」

「ひえ、おぼけ!」

神綺は明かりにしていたライトボールをスツと前に送ると徐々に青色のスカートを照らす。

そこには、人形を片手にこちらを伺う少女の姿があつた。

「誰?」

「アリスじゃないくあつ、亜響、貴方の妹よ。アリス、こちら貴女のお兄さん」

「どうも」

「…」

アリスはゴミを見る様な目でマジマジと私を見つめる。

「女の子じゃん」

「一様、男だったのよ」

「じゃあ、男の娘?」

「いや、今は女だけど」

「じゃあ、お姉ちゃん」

アリスは私を指さしそう言った。

「私は、女の子に”お兄ちゃん”なんて言う癖は持ち合わせていないので」  
「そ、そうか……」

なんか、ガツカリした気分になった。

「つて、こととでよろしくね。お姉ちゃん」

アリスは、私の腕に抱きつくと私を導いていった。

……………

この施設には数人の者が出入りしている事に気が付いた。

彼らは、人によっては本が山積みの部屋で読書をする者、黒板の前で掲題について口論する者、試験管などの研究備品を使用して薬品を制作する者たちがいた。

そして、私たちはそれらの部屋を後にして他の簡素な引き戸の部屋でなくまるで、この長がいるのではないかと思う部屋の前に着いた。

「ハイハイ」

「開けるよ」

いつの間にか、私の袖にいたアリスは何かの植物を模した銀のドアハンドルを手にし開けた。

そこは薄暗い外の様な所変わってと、青々とした植物、それを養う為の濁り混じりの

ない打ち水、

この付近には存在しない光……日光に近い灯がここを照らしていた。

「……は……魔界なのか？」

ご丁寧にもそよ風まで吹いている。

正面に石塊で織りなす机と椅子、上に積み重ねられている書物や巻物が放置され肝心の人物はそこにはいない。

「ああ、……は魔界だよ」

「?!」

視線の先から少しずれた、右隣り、木陰でハンモックを使い巻物を読んでいる人物に気付いた。

その者は起き上がり、手に持っていた物を机に置き、緑色のハットを被るとこちらへ歩み寄ってきた。

「ようこそ、若き者よ。我ら魔導研究施設『アルギュロス』が長にしてマイスターの一人、ミルラ」

そうして、彼女は唯一長い右サイドの緑色の髪を方にかけてと続けてこういった。

「ミルラ・ノーリツジ。君の先生だ」  
と爽やかな笑顔を浮かべた。

……続く

## 13話「魔導とは」

その瞳はこの世の淵を覗いているかの様に深い紫に輝いており、対照的に髪色は生き生きとした若葉を想像するような明るい新緑であるのが最初の印象だった。

「では、新入生くん。魔導とはなんだか分かるかい？」

私は一呼吸置いて問に答える。

「まずは外のマナを操作、決められた法則で現象を起こすのが魔法、反対に内なる理想で現実を変える・ねじ曲げる事が魔術と認識しています」

ふむ……

ミルラはその問いに対して非常に納得した。

そして、こうとも思った。

こいつは、ど偉い者の教育を任された……と、

「そうね、それでもいいでしょう。しかし、私たちの世界では、波に乗る事が魔法、その波再現するのが魔術と呼んでいるわ」

「わ、わかりました」

流石、教師だな……

私もその表現はあつていると何となく理解した。

「では、亜響くん。回復の魔術と祝福による回復の違いはわかる？」

「どちらも損傷を回復するものですよね……違いって、魔術か奇跡かの種別ジャンルの違いしか分からないです」

回復すれば同じではないか、そうとも言いかけた所はここだけの話にしておこう。

「そう、種別ね。じゃあ、もいつこ質問」

「はい」

アナタが知っている範囲での種別を書いてみなさい……と、

ミルラは私に白い棒状の石片を渡すと多分魔法を使ったのであろう、地面から大きく平たい岩の壁面ができています。

「魔術、魔法……うくん、奇跡、あと、化学もですかね」

「そうね、そこまででいいわ」

一旦、石片を返すところ言った。

「今書いてもらったこの種別だけど法則があるの」

「えっ」

そう、言い終わらない内に文字が輝くと宙を舞い、順番が差し替わる。

「〔奇跡〕〔魔法〕〔魔術〕〔化学〕これがこの世界の法則よ。同等の魔力や信仰ではこの法則

が当てはまるの」

「し、知らなかった……じゃあ、先生質問です。」

「何かしら？」

ミルラはにこやかに答える。

「私は神力で魔術を扱う訓練をしてきました。それでも、この法則は変わりないのでしょうか？」

「いい質問ね。動力は再利用して、燃料リソースを変えるのね……アナタ、優秀過ぎない？」

「えへへへ」

先生は軽く咳払いをすると話を戻す。

「燃料は高い順に神力、靈力、魔力、大気に存在する魔素マナその他諸々順番で力が濃いわ……。」

「そうね、失礼を承知で申し訳ないのだけれど、あなたの力、試させてもらおうかしらふつと、足元が暗くなる。」

「何か近づくと気配と共に威圧感のような物が頭上から足先へ走る。」

「上!!」

空の向こうから飛来し落ちていく一筋の光。

それはまるで突如訪れる悪夢の様な不意を突かれた。

「【フリーフォール】アナタに当てるのはこの一本だけよ」

ミルラはそう言つて、ふつと悪い笑みを浮かべた。

『思い返すんだ。練習の成果を……』

目を閉じて、体の中に流れる波動を意識。

その根幹に至る備わつた力の中から青でも赤でもなく黄色に輝く神力を引き出す。

後は、錬金術で培つた想像力で形をイメージする。

足元から一瞬風が吹くとそれはもう手元に存在した。

「詠唱省略、構築完了。」

後はそれを、振り抜くだけ。

「片刀・山無」  
へんとう やまなし

初めての魔術で出来た短い短刀で構え、空を切ると落下してくる岩に切れ間が生じ隕

石は避けていった。

「やるねえ（ニヤニヤ）」

「もう先生#」

「いや、悪いね」

ミルラは笑い出した。

「でも凄いわ。流石、神綺さまのお子さん。優秀ですね」

「ねえ、アリスは？」

ひよっこつと、ミルラの足元に現れ、さっきの出来事はなかったかの様に振る舞うアリス。

「アリスさまもすごいですよ」

ミルラさんはニコニコしている。

「さて、君の……魔術。見せてもらったがあれは完成してないね？」

「そうなんですか？」

「ふむ、あれは錬金術をイメージした投影と言う魔術になる。本来なら、形になって現れるはずだが

何ものこっていないね？」

確かに衝撃だけで短刀の握った感触や重みはなかった。

「ど、どうすれば」

「なに、それを形にするのが魔法使いよ。取り敢えず」

お茶にしましょっか……私とミルラ、アリスは部屋を後にした。

⋮  
⋮  
⋮  
続  
く